

読売新聞 きょう（7月27日）のイチ押し

1面 氾濫リスク 3日先予測（本紙の特ダネです）

京都大、東京大、日本気象協会などのチームが、3日先までの河川氾濫や高潮・高波のリスクを予測する新たなシステムを開発しました。

- ★ 国土地理院の詳細な地形データを基に、雨水が河川にどう流れ込むか、台風の進路や降雨の予想を組み合わせて予測します。
- ★ 現在の国土交通省による予測は、水位の実測値などを基にするため最長6時間先が限界でした。新システムでは72時間先まで予測可能で、事前に住民を避難させ被害を抑えることが期待されます。

1面・社会面 相模原殺傷事件から4年

相模原市の知的障害者福祉施設「津久井やまゆり園」で入所者19人が殺害され、職員2人を含む26人が重軽傷を負った事件から、26日で4年がたちました。

- ★ 新型コロナウイルスの影響で追悼式は中止になりましたが、建て替え工事中の園舎前には、関係者ら約250人が献花に訪れました。
- ★ 事件で重傷を負った入所者の男性（47）は、24時間態勢の訪問介護を利用しながら一人暮らしを始めようと、一步を踏み出しました。両親は「障害があっても、いろんな生き方ができるのだと、皆さんに考えてもらおうきっかけになれば」と願っています。

他紙と比べて

生徒・学生による学校に関するツイッター上の投稿を過去2年間分、約4億件を分析したところ、今年6月に全国で学校が再開されて以降、「疲れ」「だるい」といった投稿が急増していることがわかりました。NTTデータと読売新聞社の独自の分析で判明、第2面で特報しています。「疲れ」「だるい」の投稿は6月1～5日に計1万3157件あり、昨年の春休み明け5日間に比べると2倍以上でした。新型コロナウイルスによる長期休校などが若者の心身に深刻な影響を及ぼしていることが明らかになりました。